『ある晴れた日に』、『日記』などの直筆原稿と代表作『暢気眼鏡』、『すみっこ』。（三重県立図書館蔵）

CHRONICLE OF MIE
VOL.6
【文学編】

作家・尾崎一雄。日本文学における私小説の主脈。

日本文学の特徴とされる私小説の代表的な作家、尾崎一雄。幼少の頃、伊勢で過ごした思い出を軽妙に綴った作品には、どんな苦境もユーモラスに描き出す独特の作風が息づいている。

尾西 康充 おにし やすみつ
人文学部・文化学科教授
専門は日本近代文学

日本近代文学を最も特徴づけるものは私小説の手法である。作者が一人称の視点から自分が体験した出来事を、いささか自己暴露的に描き出す方法は、たとえどのように恥ずかしい事柄でも、読者の前では、ありのままに告白するという作者の“誠実さ”を前面に押し出すことになった。この“誠実さ”によって多くの読者は、主人公と作者とが同一人物で、作品の中で語られた事柄は、すべて作者の身の回りに実際に起こった出来事として無条件に受け入れるという作品享受の傾向が形成されてきた。

このような私小説を描いた代表的作家が尾崎一雄であった。尾崎は明治32年（1899）12月25日、神宮皇學館教授を勤めていた父八束と母タイの長男として、三重県度会郡宇治山田町（現在の伊勢市）大字浦五十番屋敷に生まれる。父の家系は祖父の代まで神奈川県小田原市下曾我にある宗我神社の神官を務めていた。4歳のときに一旦は下曾我に帰るが、7歳で父とともに再び伊勢に戻って明倫小学校に入学して、翌年まで在学した。尾崎の伝記的小説『父祖の地』（昭和10年／1935）には、「私が生まれたのは、宇治の五十鈴川のほとりだが、母が妹セイ子をつれ下曾我に帰ると共に、父と私は、山田の岡本町に移つた。今、某代議士の邸になつてゐるが、当時参宮館、相当の旅館でその離れ二間を借りた。南向きで、広い芝生庭園、向うが掘割で画（くぎ）られていた。掘割には蘭が生ひ揃ひ、青々と丈高い蘭（いぐさ）には、蜻蛉（トンボ）の脱殻がしがみついてゐた」とある。

この引用の中で尾崎が「某代議士」と呼んでいるのは、衆議院議員の浜田国松のことである。三重師範学校（三重大学教育学部）を卒業して一旦は小学校教員を務めていた浜田は、弁護士資格を取得した後、三重県郡部選挙区から衆議院議員選挙に選出され、軍部の政治干渉を批判した「腹切り問答」で日本憲政史に名をとどめることになった。他方、岡本町の「参宮館」とは、江戸時代の伊勢神宮の御師の館のことで、全国から集まった参拝客の宿泊に使われていた建物であった。

尾崎 一雄 おざき かずお
作家
1899年～1983年
明治32年（1899）12月25日～昭和58年（1983）3月31日。神奈川県小田原市で育つ。早稲田大学文学部国文科卒業。『暢気眼鏡』で芥川賞を受賞し、文壇に認められた。代表作は『虫のいろいろ』、『すみっこ』、『まほろしの記』（野間文芸賞受賞）、『虫も樹も』『あの日この日』など。昭和39年（1964）に日本芸術院会員に選ばれ、昭和53年（1978）に文化勲章受章。

『父祖の地』には、伊勢に住んでいた幼少の頃の思い出がいくつも語られている。父が凧を作ってくれたり、絵を描いたりしてくれたこと、皇學館の学生が持参してくれた菓子折を、父が「食べていいもの」と「食べていけないもの」とに分け、「食べていけないもの」はすぐに旅館の人たちにあげていたこと、父が岩淵町の碁友だちのところに遊びに行ってしまい、お守をしてもらっていた旅館の女性主人に、鼻くそを飛ばしたこと、二見ヶ浦で小船に乗ろうとして船のへりで股間を痛打してしまったことなど、日常生活のありふれた風景が点描される。

苦々しいことや恥ずかしい体験であっても、尾崎の筆にかかると、腹立たしさや諦念をまじえた少々ユーモラスなものに転じてしまう。尾崎は神奈川県立第二中学に在学していたとき、志賀直哉の『大津順吉』に衝撃を受けて作家を志すようになったが、志賀の人道的な作風を自己のものにすることができず、また昭和文壇で隆盛を極めていたプロレタリア文学のような社会批判の視点も持つことができなかった。だが32歳のとき、13歳下の山原松枝と結婚してからは、自由闊達の境地に目覚め、昭和12年（1937）に芥川賞を受賞した短編集『暢気眼鏡』に示されるような、貧しさや病気などの苦境に立たされていても、「暢気な眼鏡」を通して、それらをユーモラスに描いてみせるという独特の作風を確立させた。

芥川賞を受賞した『暢気眼鏡』。発行年によって様々な装丁がある。（三重県立図書館蔵）

文化勲章受賞記念として岩波蔵松氏に送った尾崎一雄直筆の色紙。（三重県立図書館蔵）

下曾我にあった尾崎邸。現在は小田原文学館の敷地内に移築されている。（小田原文学館提供）

三重師範学校卒業の衆議院議長・濱田国松顕彰碑。反ファシズムの姿勢を貫き、憲政史上屈指の名演説をした。